

ジェニー・エルペンベックの
“Gehen, ging, gegangen” に関する一考察
—難民問題を小説化することの意義—

山 田 やす子

〈要旨〉“Gehen, ging, gegangen” はアフリカ出身の難民を題材にした小説である。難民たちはドイツに住み、働くことを望んでいる。表題は、難民たちが苦勞して学習するドイツ語の動詞の変化であると同時に、彼らが余儀なくされる移動を表している。作者は事前に難民キャンプや庇護申請者用の宿泊施設を訪れるなどして、入念なリサーチをしている。

ヨーロッパに足を踏み入れる難民たちにとって、以前から多くの難民を受け入れており安全と良好な生活条件が得られるドイツは理想的な移住地である。作者の主張は、難民たちにドイツにおける滞在と就労の許可を与えるべきだということである。

作者は、難民というテーマをルポルタージュではなく小説という形で表現した。主人公は旧東独出身で定年退職したばかりの元大学教授である。この主人公が、全く無関心の状態から異文化としての難民と関わるようになり、徐々に受容していく。最後にはドイツ人と難民が一堂に会して心を通わせ、主人公は長年のトラウマから解放される。作品においては、全体を通して1本の直線としての主人公の変化の物語が語られる。そして、その周りに作者がリサーチした難民の状況、およびアフリカの歴史や文化についての報告が点として散りば

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

められる。

作品全体を通して、語りの視点と会話の文体が多用で変化に富んでおり、作品の表現を豊かにしている。

〈キーワード〉移動 時間 難民 異文化 ベルリン

はじめに

ジェニー・エルペンベックは、1967年旧東独の東ベルリン生まれの作家、演出家である。父は物理学者、哲学者、作家であり、母はアラビア語の翻訳家である。父方の祖父母は2人とも作家だった。エルペンベックはアビトゥア終了後、劇場の小道具係や衣装係として働いた後、フンボルト大学で演劇学、次いで音楽大学で音楽劇の演出を学んでいる。その後、グラーツのオペラハウスで演出助手として働き、90年代から作家活動を開始している。最初の作品は1999年の“Geschichte vom alten Kind”、他に“Heimsuchung”（2008），“Aller Tage Abend”（2012）など多数ある。また、2016年のトーマス・マン賞ほか多くの賞を受賞している。世界に最もよく知られた、作品の外国語への翻訳も多いドイツの女性作家の1人である⁽¹⁾。

2015年刊行の“Gehen, ging, gegangen”は、2015年のDeutscher Buchpreis（ドイツ書籍賞）のShortlist（最終の6冊）に残った作品で、2014年前後のドイツの首都ベルリンに滞在する主に北アフリカからの難民を題材にした小説である。

作品については多くの書評が書かれているが、評価は肯定的なものと否定的なものに分れる⁽²⁾。肯定的な評価としては、時代に即した小説、現実を反映している、あまり関わることはない難民に対して読者の心を開かせることに成功している、難民に関する高度な専門知識が示されており、月並みな表現や美化がまったくない、入念にリサーチした相互理解に関する小説、難民に対する同情ではなく理解を生み出す、文学を通して理解を促すという文学の真価を発揮させた作品である、などが挙げられる。他方で否定的な評価も少なくない。否定的な評価において多く指摘されるのが主人公リヒルトの設定である。つ

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

まり、難民の話を全面に出さずに、1人の裕福な市民の典型である主人公に焦点を当てている、さらには飽き足りた西欧人の自己陶醉の域を出ていないと批判される。小説という形ではなく、ルポルタージュの方がよかったのではないかとの疑問も呈されている。他には、現実と反している、一種のユートピアが描かれている、難民の描き方が一面的である上に思い上がった叙述の仕方である、難民たちが個人として描かれておらず、悲惨な状況は伝わるがそれぞれの故郷での政治的背景などが語られていないために、あいまいなものとなっているなどの指摘が見られる。また、作品に登場する難民たちのほとんどが親戚で、悲惨な目に遭っており、トラウマを抱えていて、犯罪者や暴力的な人物が1人もいないことが現実的でない、との指摘もある。

いずれにせよ“Gehen, ging, gegangen”は、現在のヨーロッパにおける極めて大きな問題の1つである難民問題を題材としている。その際にルポルタージュやエッセイとしてではなく、小説という形で表現している。そこにこの作品の意義があるといえるのではないだろうか。

本稿では、ドイツにおける難民の現状と作者の意図、主人公の役割、語りの多様性に焦点を当てて考察する。

1. 作品の構成とテーマ

1. 1. 作品について

作品は55の章に分けられており、最後に謝辞とベルリンの難民への寄付の誘いがつけられている。ところどころにイタリック体の文が含まれるが、それらは文学・新聞記事・法規則・個人的なメモなどからの引用である。時は2014年夏から2015年春にかけて、場所はドイツのベルリンである。これに主人公の視点でさまざまな過去の回想が織り込まれる。場所についてもヨーロッパ各地やドイツ国内の都市、主に北アフリカの各地および古典文学に描かれる場所、また主人公がかつて訪れたところなどが回想形式で、あるいは難民が語る話として表されている。主たる時制は現在、回想部分などには現在完了と過去が用いられる。語りの形式は作品に登場しない語り手による3人称の語りである。語り手は大半において主人公リヒャルトに寄り添う形で、リヒャルトの視点で語

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

る。読者は、リヒャルトの思考および回想に従って現実や過去の出来事を徐々に知っていくことになる。作品の語りの特徴については、4. で改めて考察する。

1. 2. 登場人物

主人公は、定年退職したばかりの古典語・古典文学専攻の元大学教授リヒャルトである。妻のクリステルは5年前に亡くなっており、リヒャルトから去った愛人には名前が与えられていない。この2人は回想部分においてのみ登場する。リヒャルトの古くからのドイツ人の友人たちにはリヒャルトと同様、ファーストネームのみが与えられている（デトレフ、シルビア、マリオン、アンネ、ペーター、マリー、トーマス、アンドレアス、モニカ、イェルク）。そのうちの幾人かにはその人の特徴を表す説明的な呼び名がつけられている（デブ、考古学者、ヘルダーリン読者など）。他に難民たちのドイツ語教師であるエチオピア人の女性も登場する。

アフリカの難民たちには公的な場面の描写で姓名が与えられる場合もあるが、多くは普段の呼び名が用いられている（ラシド、アワド、カロン、オサロボ、ルーフ、アリなど）。また、アフリカの名前は難しいとして主人公がその人物の印象や特徴、およびギリシア神話や古典などから連想してつけた名前が用いられることも多い（アポロ、オリンピア、ゼウス、トリスタン、箒を持った痩せ男、ヴィスマルの月など）。

エルペンベックの文体の特徴の1つとして「繰り返し」があげられるが⁽³⁾、名前に関しても多くの場合その人物の呼び名や特徴が何度も繰り返されるので、特に難民の場合誰のことが語られているのかわかりやすい。ドイツ人の名前に関しても姓がないので、職業などの付随事項がついて、それが繰り返されることで人物像がつかみやすくなっている。

1. 3. あらすじ

8月に定年退職したばかりの元大学教授リヒャルトは、5年前に妻に先立たれ、愛人にも去られて、湖畔の家でルーティンのような日常を送りながら1人で暮らしている。年は取ったが年金も十分にあり節約の必要もなく、今後は時間のたっぷりある悠々自適の生活を送れるはずである。旧東独時代から政治的

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

なことにはほとんど関心がなく、古典文学の研究に専念してきた。あるとき町で黒人難民たちのハンストがあったが、リヒャルトはそのすぐ近くを通っても全く気づかなかった。やっと夜のニュースで黒人難民のことを知り興味を持ち始める。しかし、自分は難民たちの出身地であるアフリカについて何も知らないと感じる。リヒャルトは難民たちのキャンプがある場所へ出かけていく。

やがて難民たちは施設に収容される。リヒャルトは多くの質問を用意して家の近くにある難民施設の1つを訪れる。アフリカでの暮らしや、戦争、迫害、ヨーロッパへの渡航について何人もの難民の話を聞くうちに、ヨーロッパにおける難民庇護に関する規則や難民の現状を学んでいく。施設のドイツ語の授業の手伝いをし、何人かの難民を自宅に招き、ピアノを教えたり、本を貸したり、自宅の片付け仕事の手伝いを頼んだりする。クリスマスにも1人を招待する。役所についていき、弁護士のもとへも同行する。病人には親身になって世話をし、難民たちのデモでは自分の身分証明書を提供する。さらに、困っている難民の家族のためにガーナに土地を買ってやる。家が荒らされ難民の若者を疑いはするが、ただ連絡を待つのみである。

ついに難民たちが施設を出なければならなくなると、リヒャルトは友人たちにも呼びかけ自宅や友人のもとに難民を一時的に住ませる。早春になり、リヒャルトの誕生日にドイツ人と難民が集まり、和やかな雰囲気の中みんなの心が1つなる。

1. 4. 作品のテーマ

エルペンベックは“*Heimsuchung*”において、ドイツのある土地における太古の時代の湖の生成にはじまり、現代までの約100年間に湖畔にある屋敷に住む人々のさまざまな人間模様と、その土地で繰り広げられる出来事を描いている⁽⁴⁾。そこでは、変わらず留まる土地を流れる時間とその土地に移り住み去っていく人々の移動がテーマになっている。“*Gehen, ging, gegangen*”においても時間と移動は中心テーマの1つである。作品では、古代や中世の文学および歴史を現代と結びつけて、その中で行われる移動が描かれる。移動の主体はアフリカからの難民である。作品のタイトルは、ドイツでの滞在を望む難民たちが苦勞して学習するドイツ語の動詞の変化の代表例であると同時に、難民た

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

ちが余儀なくされる移動を表している。時間と移動は主人公にとっても大きな関心事であり、自ら体験し直面している問題でもある。さらに人類にとっても常に深く関わってくる問題の1つである。

もう1つのテーマは異文化の理解と受容である。難民が身近にいるということ、難民を受け入れるということは異文化に出会い、理解し、受容するということに他ならない。しかし、その際には当然無理解、不寛容、反発も生じてくる。作品では、難民の語りを通してアフリカおよびアフリカの文化について具体的な形で語られている。他方では、ヨーロッパにやってきた難民たちに対する不寛容および批判や非難が主に公的文書、メディアなどの引用を通して示されている。

2. ドイツにおける難民の現状と作者の意図

2. 1. ドイツにおける難民の現状

2. 1. 1. シェンゲン協定とダブリン規則

ドイツ国内の難民の現状について考えるにあたって、まずEUの難民政策の主要な枠組みである「シェンゲン協定」と「ダブリン規則」について見ておく必要がある⁽⁵⁾。

シェンゲン協定は、1985年に原締約国（ドイツ、フランス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク）によって署名され、1995年に発行された地域協定で、2017年現在26カ国が加盟している。協定においては、協定締約国間の移動において移動者の国籍に関わらず、国境管理を廃止する原則が規定されている。つまり、一旦領域内に入れば領域内における移動が自由に行えるということである。この協定では、シェンゲン領域内の移動の自由が促進されているが、他方では領域外に対する国境管理の強化が重視されている。

ダブリン規則は「欧州共通庇護制度」を規定する5つのEU法規の1つである。ダブリン規則の前身は1990年に採択された「ダブリン条約」で、2003年に一旦改定され（「ダブリンII」）、2013年に現行版が採択されている（「ダブリンIII」）。作品で言及される規則は「ダブリンII」という名称であるので、現行版の採択以前の資料に基づいているのであろう。

ジェニー・エルベンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

ダブリン規則は、庇護審査をどの EU 加盟国が担当するかを決める詳細な手続きを定めている。担当国は以下の優先順位に従って決定される。

- ① 庇護申請者の家族が合法的に居住しているか庇護申請をしている国。庇護申請者が未成年の場合、兄弟姉妹あるいは親戚の居住国も考慮
- ② 庇護申請者に居住許可証あるいは査証を発行した国
- ③ 庇護申請者が非合法的に入国した国
- ④ 庇護申請者が最初に庇護申請を行った国

この規則に従うと、大多数の庇護申請者は③か④に該当することになる。また、ダブリン規則では、難民申請を優先的に審査する国の基準とともに EU 加盟国内での移送手続きが定められている。つまり、難民申請を希望する者は原則的に最初に到着した EU 加盟国で申請を行い、その国で審査を受けることになる。従って、難民の出身国に近く、EU 域外国境を抱えているイタリア、ギリシア、ハンガリー、ルーマニアなどの国がこれに該当する。作品においてもベルリンの難民たちは度々手続きのためにイタリアへ行っている。

2. 1. 2. ドイツの難民事情

2015年、中東やアフリカなどからヨーロッパ諸国にやって来る難民が急増した。背景には、2011年のリビア内戦や同じく2011年から続くシリア内戦などによる北アフリカや中東の情勢の悪化がある。リビア内戦では、作品にも書かれているように、仕事を求めてリビアにやって来た他のアフリカ諸国からの移民や非正規労働者をもヨーロッパに向かわせた。難民たちは海路であるいは陸路でイタリアやギリシアに到着すると、大部分がそこでは難民申請をせずに北のドイツやスウェーデンを目指す。特にドイツは EU 域内では経済が好調である上に、人道的観点から多くの難民を受け入れてきた。さらに、ナチスドイツ時代の反省から難民政策が手厚い。しかも、メルケル首相は難民受け入れに積極的な姿勢をとり続けている⁽⁶⁾。

ジェニー・エルベンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

（表 1） EU 内の難民申請者数の多い国（再申請を含む）

	2008	2011	2012	2013	2014	2015
1	フランス 41,840	フランス 57,330	ドイツ 77,485	ドイツ 126,705	ドイツ 202,645	ドイツ 476,510
2	イタリア 30,140	ドイツ 53,235	フランス 61,440	フランス 66,265	スウェーデン 81,180	ハンガリー 177,135
3	ドイツ 26,845	イタリア 40,315	スウェーデン 43,855	スウェーデン 54,270	イタリア 64,625	スウェーデン 162,450
4	スウェーデン 24,785	ベルギー 31,910	イギリス 28,800	イギリス 30,585	フランス 64,310	オーストリア 88,160
5	ギリシア 19,885	スウェーデン 29,650	ベルギー 28,075	イタリア 26,620	ハンガリー 42,775	イタリア 84,085

墓田桂『難民問題』中公新書（2016）84 頁をもとに筆者作成

表 1 は、EU 域内の難民数の多い国から順に年ごとに国と難民数を示したものである。2011 年まではフランスでの申請者数が一番多かったが、2012 年からはずっとドイツが 1 位となっている。特に、2013 年以降は他の国と比べてドイツでの申請者の数が圧倒的に多い。

作品が書かれたのは、リビア内戦後の国内情勢の悪化から逃れて大勢の難民が難民船でイタリアに入った 2013 年以降のことであるので、2015 に比べるとヨーロッパに入った難民数は少なかった。しかし、表からもわかるようにちょうどその頃からドイツでの申請者数も急増している。作品に登場するアフリカ難民たちも同様にドイツを目指してやって来て、ドイツでの滞在と就労が許可されることを望んでいる。

2. 1. 3. 反難民的状況

作品の執筆は、ドイツ国内においてまだ難民を歓迎するムードが高かった時期に行われたと思われる。しかし、刊行直後から急激な難民の増加が始まった。さらに、2015 年から 16 年の年末年始にかけて北アフリカや中東出身者と見られる男たちによる性的攻撃を含む犯罪行為が相次ぎ、社会に衝撃を与えた⁽⁷⁾。これに対して一部のドイツ人が反発し、各地で難民宿泊施設を標的にした放火事件が起こっている。

作品では難民に対する過激な反発や攻撃については全く触れられていない。しかし、随所に難民に対する無関心な発言や行動の例は挙げられている。例え

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

ば、ネットに書き込まれた Mir Egal（俺にゃあ関係ねえ）氏に代表される、「地球上に人が多すぎるんだよ」「救助隊が気の毒だよ」「アフリカ人はアフリカで自分たちの問題を解決すればいいんだよ」「アフリカ全土をここで養うなんてできないよ」などの表現。さらに、難民の抗議活動を応援するはずの人々が掲げるプラカードに、「ケニアのゲイとレズビアン万歳！」と書かれているなど。また、主人公の友人の精神科医は病人がアフリカ人だとわかると、アフリカ人を蔑んだ発言をする。ある難民の若者は、地下鉄で自分が座ると周りの人たちが離れていく、と語っている。

2. 2. 作者と難民のかかわり

エルペンベックは“Gehen, ging, gegangen”の刊行後、いくつかのインタビューに答えて、自らのアフリカからの難民とのかかわりについて語っている⁽⁸⁾。

近年、イタリア領最南端の島ランペドゥーサ島はアフリカや中東からの移民・難民の目的地の1つとなっており、近海ではしばしば難民船の沈没事故が発生している。2013年10月3日には、リビアからイタリアへ向かう難民船が沈没した⁽⁹⁾。イタリアの沿岸警備隊が救助に向かったが500人以上の乗員のうち生存者は155人、死者は360人に上った。エルペンベックはこの事故以来難民に関心を持ち始め、実際に事故現場近くまで出向いている。

その後、2014年5月にはベルリンのアレクサンダー広場の近くでアフリカの男性たちによるハンストがあった。このことについては作品の2章で語られている。その直後にエルペンベックは作品の主人公と同様にオラーニエン広場の難民たちの抗議キャンプを訪れている。キャンプが撤去されると今度は庇護申請者用の施設に赴き、英語ができる難民たちと対話をしているが、これも主人公が作品の中で追体験している。さらに、彼女は難民たちがドイツ語を学ぶのをともに体験し、諸事情により学習を何度も中断せざるをえなくなる様子を見ている。エルペンベックはこういった経験により自身の日常が変わったと述べている。

エルペンベックが特にアフリカからの難民に感心を持ったのには、他にも理由がある。まず、母親がエジプト、アルジェリア文学の研究者であり、アラビ

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

ア語の翻訳者であったので、エルペンベックは幼い頃からアフリカの文化に触れる機会が多かった。さらに、父方の祖父母はソ連への亡命者であり、母方の祖父母は第2次世界大戦末期に東プロイセンから逃れてきた難民であった。

エルペンベック自身が現在ガンビア出身の青年を被保護者としているという。

2. 3. 作品における難民についての作者の意図

作者エルペンベックがインタビューでも語り、作品中でも再三主張していることは、難民たちに滞在許可を与え、正規に仕事ができるように配慮すべきだということである。難民はずっと難民だったわけではなく、日常生活、家族、住む場所を持った全く普通の人間だったのである⁽¹⁰⁾。ところが、それまで彼らの人格を形成していたものが突然なくなってしまった。しかし、新しい土地では受け入れられず、以前のような生活をする事ができない状態である。

さらに、難民の多くが難民でありながらアフリカにいる家族のもとに仕送りをするしなければならない。エルペンベックは、「難民に対する就労の禁止は取り去らなければならない。というのも、それがここでのすべての問題の原因だから」⁽¹¹⁾と述べている。作品の中である難民は「働くということは私にとって呼吸のように自然なことなのです」(241)⁽¹²⁾と言っている。

また、滞在許可が与えられないので難民たちは絶えず移動を繰り返さなければならない。エルペンベックは作品の中で、“Wohin geht ein Mensch, wenn er nicht weiß, wo er hingehen soll?”（どこへ行くべきかわからないとき、人はどこへ行くのか？）という文のみが書かれた2つのページを並べている(328f)。「これらの人々が私たちのように住居に住み、私たちのように何らかの仕事に専念できるようになることを目指して、私たちみなが努力すべきだと思います」⁽¹³⁾という思いが作品にこめられている。

3. 主人公リヒャルトと難民 — 異文化の受容 —

3. 1. 主人公の役割

先にも見たように、作品に対する否定的な評価の原因の1つは主人公リヒャルトの設定にあった。ここでは、リヒャルトの人物像を見た上で、作者エルペ

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

ンベックにとって主人公リヒャルトはどのような存在であるかを考える。

リヒャルトは古典語、古典文学の研究者で大学教授を退職したばかりである。これまでの研究生生活において業績も残し、学生指導も落ち度なくやってきた。5年前に妻を亡くしており、妻との間に子どもはいない。長く付き合っていた愛人も去ってしまい、今は湖畔の家に1人で暮らしている。几帳面な性格で、日常生活においては退職前と変わらない規則正しい生活を繰り返している。古くからの気の置けない友人たちとの交流も長く続いている。今や自由な時間が有り余るほどあるのだが、それをどう使うべきかわからないでいる。幼い頃に終戦を迎え、シュレージエンからドイツへ逃れてきた経験がある。さらに、旧東独国民として、「1990年に突然1日で別の国の国民になっていた、窓からの景色は変わらないのに」（103）という経験もしている。再統一後は妻とともに旧東独時代には訪れることのできなかったさまざまな所へ旅行した。当時手に入らなかったものを手にして喜ぶこともある。ベルリンに住んでいるが、旧西地区については未だに不慣れで自信がない。

このリヒャルトが難民の存在に気づき、恐る恐るではあるが研究者としての旺盛な好奇心をもって近づいていく。難民たちと関わり、話を聞くうちに徐々に難民たちの過去の経験、悩み、願望などを知り、また彼らの故郷であるアフリカの文化についても学んでいく。

エルペンベックは、主人公に退職教授のリヒャルトを選んだ理由として、初期の段階から女性の主人公にするつもりはなかった、「女性だと要援助者への関心がどうしてもマザーテレサ的なものになってしまうから」と述べている⁽¹⁴⁾。終戦後の避難民としての体験、旧東独出身者として突然の体制転換を経験したこと、および退職直後の日常の急激な変化という点もリヒャルトを主人公として選んだ理由と見てよいであろう。

作品においては、1つには異文化である難民たちとの関わりを通してのリヒャルトの変化が描かれる。それがリヒャルトの物語として作品全体を貫く1本の直線となっている。他方では、エルペンベックが入念にリサーチした難民に関する情報が、難民の語る話として、報道された内容として、実際の出来事として、あるいは辞書の記述として、法律として、規則としてさまざまな形で

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

点的に散りばめられている。こちらはルポルタージュの部分と呼んでもいいかもしれない。このルポルタージュの部分では、リヒャルトは作者エルペンベックの言わば分身として読者に伝える媒体の役目を果たしている。

ルポルタージュ的部分で紹介されている事項を以下にいくつか挙げてみる。難民たちが語るアフリカおよび逃走の話（アボロ、アウド、ラシド、カロンの話）、ボートの転覆による海難事故、アレクサンダー広場のハNST、オラーニエン広場の難民キャンプ、宿泊施設、フリートリッヒスハインの占拠事件など。さらに、難民庇護に関する法規としてのダブリンII、その他の合法的ではないが滞在を許すための書類や規則（Fiktionsbescheinigung, Duldung）⁽¹⁵⁾、難民に関する規則、給付金、語学学習の提供などである。さらに、難民にとって携帯電話と定期券が贅沢品ではなく、必需品であることの説明も含まれるであろう。

3. 2. リヒャルトと異文化としての難民

リヒャルトは難民たちに近づき、話を聞き、自宅に招き、一緒に行動し、親身になって世話をする過程で、徐々に異文化としての難民を理解し、受け入れていく。

最初リヒャルトは難民たちの抗議行動のすぐそばを通っても気づかない。後に存在を知り、まずは難民たちが集まっている集会所へ行くが、氏名を問われるのを避けて逃げ帰ってくる。次いで難民キャンプの場所へ出かけて行き観察する。同時に、自分が難民たちの出身地であるアフリカやその文化について全くの無知であることを自覚し、勉強する。根っからの研究者であるリヒャルトは有り余る時間をアフリカという地とアフリカ文化の研究に当てようと、質問を用意して調査を開始する。しかし、難民たちはリヒャルトが用意した質問に答えるというよりは、自分たちが経験してきた過酷な運命を物語っていく。それによりリヒャルトは相対して話している個々の人間としての難民を知っていく。そこで語られる内容が、難民たちの悲惨な体験およびアフリカ文化の説明として読者に伝えられる。読者は、リヒャルトとともに難民たちが語ることを受け入れていくことになる。

難民たちが語る内容は、1つには彼らの故郷の不安定な政治的、経済的状況

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

とそこから逃れてヨーロッパに至るまでの過酷な体験である。他に、迫害された少数民族のこと、祭りのこと、父親および母親の役割、長男の義務などのさまざまなアフリカの文化や現状が紹介される。この点においては、専門知識を得るにはうってつけの本であるという評価は正しいといえる。

最初アフリカおよびアフリカ人に対して関心もなく、無知であり、難民たちを自分とは異質のものとして、研究対象として捉えていたリヒャルトは、次第に人間において例えば肌の色の違いや貧富の差というような「境界」など本来存在しないのではないか、という考えに至る。

3. 3. リヒャルトの内的変化

リヒャルトは難民たちと付き合い、難民たちに助力し、難民たちを知り、自分と彼らに根本的な違いはないと考えるようになったことで、内面的にも変化が起こった。

最終章には作者エルペンベックが思い描く理想像が描かれているのであろう。ドイツ人と異質のものである難民たちが一堂に会して、互いに分け隔てなく集っている。そこでは1人の悲しみを全員で共有する様子が語られている。

そんな中で亡き妻のことを尋ねられたリヒャルトは、みんなの前で長い間トラウマとなっていた妻の中絶と脚を伝って流れた血について話す。そして、「私が耐えられることは、私が耐えられないすべてのことの表面にすぎない」（348）と言う。

最後に、作品の冒頭から幾度となく語られるリヒャルトの家の前の湖で溺死した男のモチーフについて考えたい。リヒャルトは毎年夏には湖で泳いだり、ボートに乗ったりしていた。湖で過ごす時間はリヒャルトにとって日常であった。しかし、ある時そこで男が溺死して、死体が見つからないままになっている。リヒャルトだけでなく、近隣の住民たちもその夏は湖に近づこうとしない。エルペンベックは湖で溺死した男のモチーフについて、難民船の海難事故で大勢が海で亡くなったこととももちろん関連があるとしつつ、「私の本の中の死者は、隠されていてしかも大きなエネルギーを持っているすべてのことに対するイメージでもあります。ひょっとしたら私たちがそれらを見るのができないか、あるいは見ようとしなからかもしれません」と説明している⁽¹⁶⁾。

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

人は見たくないものは見ようとしないうということであろうか。

リヒャルトは頻繁に湖で死んだ男のことを考えるのだが、この死者そのものについては作品全体を通して全く進展がない。しかし、最終章においてリヒャルトは、目の前の湖が昨夏この湖で1人の人間が死んだという記憶と解きがたく結びついているのだと気づく。そして「この湖は永遠に誰かが死んだ湖であり続けるだろう、だが永遠にとっても美しい湖でもあり続けるだろう」(340)と考え、夏になったらまた泳いでみようかと思う。何かに対して辛い思い出があると、たとえ良い思い出があっても辛いことばかり思い出すものである。だから思い出さないようにする。リヒャルトのトラウマも同様だったのであろう。

4. 語りと語り手の視点の移動

作品では、主として作品の外にいる語り手が語る3人称の語りの形で内容が展開されていく。語り手の視点は主に主人公のリヒャルトに置かれるが、その際に一体になっていると思わせるほどリヒャルトに寄り添ったり、少し距離をとったりする。さらに、語り手の視点は時としてリヒャルトから離れる。全体を見渡して状況を俯瞰的に述べることもあれば、リヒャルト以外の登場人物に寄り添うこともある。体験話法も随所に見られる。

会話文では直接話法の1人称の語りが多用されているが、その導入の仕方には多様性がある。さらに、間接話法が用いられる箇所も多い。

作品全体を通して語り、会話文ともに表現形式が非常に多様で変化に富んでいる。ここでは日本語の試訳を添えて例を挙げながら個々に見ていく⁽¹⁷⁾。

4. 1. 3人称の語り

4. 1. 1. リヒャルトの視点

3人称の語りの多くの部分は、語り手が主人公リヒャルトに寄り添う形でリヒャルトの視点から語られている。作品の冒頭からかなり先まで、読者にわかるのはリヒャルトの現実とリヒャルトの思考が向けられることのみである。冒頭の部分は作者とリヒャルトが一体化して語っているとも見ることができる。Vielleicht liegen noch viele Jahre vor ihm, vielleicht nur noch ein paar. Es ist jedenfalls so, dass Richard von jetzt an nicht mehr pünktlich aufstehen muss,

ジェニー・エルベンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

um morgens im Institut zu erscheinen. Er hat jetzt einfach nur Zeit. Zeit, um zu reisen, sagt man. ...Was fängt er jetzt mit dem Kopf an? Mit den Gedanken, die immer weiter denken in seinem Kopf? Erfolg hat er gehabt. Und nun? ... (9)

（ひょっとしたら彼の前にはまだ多くの年月があるかもしれないし、たった数年かもしれない。いずれにしてもリヒャルトは今からはもう毎朝研究所に行くために時間どおりに起きる必要はないのだ。今や彼には時間だけはある。例えば旅行する時間。...今から頭で何を始めよう？ 再三頭の中で考えている思考で。成果は上げた。そして今からは？）

しかし、そのすぐ後に続く文では、語り手はリヒャルトから少し離れた視点からリヒャルトを見ている。

Von seinem Schreibtisch aus sieht er den See. (9)

（彼はデスクから湖を見る。）

多くの場合、リヒャルトの視点で始まり、主語がリヒャルトの場合は語り手がリヒャルトに寄り添っている。しかし、例えば12章の途中では同じリヒャルトという人物が主体になっていても、リヒャルトという名が用いられていない。ここでは語り手の視点がリヒャルトからやや離れていると見ることができよう。

Der emeritierte Professor, der hier an einem Tag so vieles zum ersten Mal hört, als sei er noch einmal ein Kind, begreift nun plötzlich, dass der Oranienplatz nicht nur der Platz ist, den der... (70)

（まるでもう1度子どもになったように、ここで1日にとってもたくさんのことを初めて聞いたその退職教授は、今突然オラーニエンプラッツはもう...という場所ではないのだと理解した。）

4. 1. 2. 俯瞰的な語り

2章の冒頭では語り手は遠くから俯瞰する形で状況を語っている。

An einem Donnerstag Ende August versammeln sich zehn Männer vor dem Roten Rathaus in Berlin. Sie haben beschlossen, heißt es, nichts zu essen. Drei Tage später beschließen sie, nun auch nichts mehr zu trinken. Ihre

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

Hautfarbe ist schwarz. Sie sprechen Englisch, Französisch, Italienisch. Und noch andere Sprachen, die hierzulande niemand versteht. (18)

（8月末のある木曜日、10人の男たちがベルリンの赤の市庁舎の前に集まっている。彼らは何も食べないと決めたのだそうだ。3日後には飲み物も一切取らないと決めた。彼らの肌の色は黒い。彼らは英語、フランス語、イタリア語を話している。そして、当地では誰も理解できないいくつかの他の言葉も話している。）

続く文では語り手の視点は少し男たちに近づく。

Was wollen die Männer? Arbeit wollen sie. Und von der Arbeit leben. In Deutschland bleiben wollen sie. (18)

（男たちは何を望んでいるのか。彼らは仕事がほしいのだ。そして働くことで生活したい。彼らはドイツに留まりたいのだ。）

この後すぐに、3人称の語りの文の中に、引用符なしで、黒人たちと警察や役人による直接話法の会話が埋め込まれていく。

Wer seid ihr, werden sie von der Polizei...gefragt. (君たちは誰だ、と彼らは警察に...尋ねられる。) Wir sagen nicht, sagen die Männer. (俺たちは言わない、と男たちは言う。)

4. 1. 3. アポロの視点

12章はリヒャルトの視点で始まるが、若い難民アポロとの会話が進む中、急にアポロの視点に移行する。その際に語り手は体験話法を用いてアポロと一体化していると見られる。3人称の主語 er を1人称で訳してみるとすんなり落ち着く。

Der Junge schweigt. Warum sollte er einem fremden Mann sagen, dass er nicht weiß, warum er nie Eltern hatte? ...Warum sollte er einem fremden Mann die Narben zeigen, die die Schläge der sogenannten Familie an seinem Kopf und an seinen Armen hinterlassen haben? Totschlagen wollten sie ihn. Befreundet war er nur mit den Tieren. (67f.)

（若者は黙る。どうして俺は、自分に両親がいない理由などわからないと知らないおじさんに言わなければならないのか。... どうして俺は知らないおじさん

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

に、いわゆる家族の殴打が自分の頭や腕に残した傷を見せなければならないのか。奴らは俺を殴り殺そうとしたんだ。動物だけが俺の友だちだった。）

その後またリヒャルトの視点に戻る。

4. 1. 4. アワドの視点

27章は最初から大部分がアワドの視点で語られる。

Sein Kopf fällt ihm beinahe auseinander vor Schmerzen, Awad will nicht denken, aber er muss, das Denken ist in seinen Kopf eingesperrt und stößt von innen gegen den Schädel. (164)

（痛みのあまり彼の頭はほとんどばらばらに壊れそうだ。アワドは考えたくない、でも考えなくてはならない、思考が頭の中に閉じ込められて中から頭蓋を突く。）

Awad diktiert, und der ältere Herr, der sehr höflich ist, aber vielleicht auch verrückt, schreibt alles sorgfältig in sein Notizbuch.... (165)

（アワドが口述し、とても礼儀正しいが、でもひょっとしたら頭がおかしいかもしれないその中年の紳士が全部几帳面にノートに書き取る…）

アワドの視点だからこそリヒャルトのことを「でもひょっとしたら頭がおかしいのかも」と考える。語り手が距離をとって語っているのであればこのような表現は用いないだろう。

主にアワドの視点で語られている27章であるが、語り手がリヒャルトからもアワドからも距離をとって語り始めるところがある。

Als sie das Betreuerzimmer betreten, sitzt schon ein schwarzhäutiger Mann auf dem Stuhl in der Mitte. Die alte Betreuerin desinfiziert gerade die Stelle an seinem Arm, in die sie hineinstechen will. (169)

（2人が看護人室へ入ると、すでに肌の色の黒い男が1人中央の椅子に腰掛けられている。年輩の女性の看護人がちょうど注射しようと彼の腕を消毒している。）

4. 2. 会話文

会話文は難民が自分のことを語るときやリヒャルトと友人たちとの会話、リヒャルトと公的機関の人たちとの会話などで用いられる。

4. 2. 1. 3人称の語りの中に突然1人称の会話文が挟まれる。友人宅で

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

のパーティーの場面はその典型である。ここではパーティーの様子を語る中で、その時々のお話拾われそのまま挟み込まれているように描かれている。
Es klingert wieder, ein Blumenstrauß, ein Mantel, lass die Schuhe ruhig an. So ein Catering Service ist wirklich gar keine schlechte Idee. Fanden wir auch. Und das Geschirr nehmen die sogar ungewaschen wieder mit. Ach, wirklich? (88)

（また呼び鈴が鳴る。花束、コート。靴は履いたままでいいわ。こういうケータリングサービスってホント悪くないわね。私たちもそう思うわ。食器だって洗わなくても持ち帰ってくれるのよ。ええ、本当に？）

Mit Monika, der Germanistin und ihrem schnurrbärtigen Mann Jörg, die am Fensterbrett lehnen, waren Richard und Christel oft zusammen im Urlaub, meist an der Ostsee. Ich darf mein Enkelkind nicht mehr nehmen, meine Schwiegertochter hat sich da so. Ich war bis vor zwei Wochen drüben, Chicago, eine Gastprofessur. Sylvia, die zweite Frau seines Freundes ist eine Stille.... (90)

（窓枠にもたれかかっているゲルマニストのモニカと口ひげを生やしたその夫イェルクとは、リヒャルトとクリステルはしばしば一緒に休暇を過ごした。たいていはバルト海で。私もう孫を抱けないのよ。お嫁さんがね。私2週間前まで向こうにいたの、シカゴよ、客員教授でね。友人の2度目の妻のシルビアはおとなしい。）

4. 2. 2. 1 人称のお話の前か、中間か、後に“sagt er” “fragt er”などの付加がある。その際話者が誰であるかが明瞭な場合には省略されている。

Wenn mein Rücken mitmachen würde, hätte ich dir geholfen, sagt Ditlef.

Ich weiß schon, sagt Richard.

Tuareg ist dieser Apoll?, fragt Thomas.

Ja.

Aus Niger?

Ja.

Na, dann halt mal den Geigerzähler an ihn ran, bevor du ihm Guten Tag

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

sagst.

Ich weiß, sagt Richard.

Wieso denn?, fragt Sylvia.

In Niger gibt es so viel Uran wie sonst auf der Welt fast nirgends, sagt Richard. (181)

（背中が言うことをきけば君を手伝うんだが、とデトレフが言う。

わかってるよ、とリヒャルトが言う。

そのアポロっていうのがトゥアレグなのか、とトーマスが尋ねる。

ああ。

ニジェール出身？

ああ。

それならそいつに挨拶する前に、ガイガーカウンターで計測しろよ。

わかってるよ、とリヒャルトが言う。

いったいどうしてなの、とシルビアが尋ねる。

ニジェールには世界のほとんどどこにも例を見ないほどたくさんのウランがあるんだよ、とリヒャルトが言う。）

4. 2. 3. 主に難民との1対1の質問形式の会話の場合は話し手が示されずに会話のみが改行を伴って示される。ここではリヒャルトが質問して、アポロが答えている。

Aber du hast nicht in Arlit in einer Mine gearbeitet, oder?

Nein, wir hatten Kamele.

Du bist mit der Karawane gezogen?

Ja.

Womit habt ihr gehandelt?

Wir haben die Kamele nach Libyen verkauft.

Von welchem Alter an hast du das gemacht?

So ab zehn. Ab zehn geht man mit den Männern... (186)

（だが君はアルリットの鉱山では働いていなかったんだね。

はい、僕たちにはラクダがいたから。

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

君はキャラバン隊と移動していたの。

はい。

君たちは何を商っていたの。

僕たちはリビアにラクダを売っていました。

君は何歳からやっていたの。

10歳くらいから。10歳から大人たちの仲間入りです…)

4. 2. 4. 「:」の後に直接話法の会話が続く。

Sylvia sagt: Ich stelle mir immer vor, dass auch wir noch einmal fliehen müssen, und dann wird uns auch niemand helfen.

Detlef sagt: Rein nach dem Gesetz der Wahrscheinlichkeit.

Sylvia sagt: Und wohin überhaupt?

Richard sagt: Ich hab schon mal überlegt, mein altes Motorrad auf die andere Seite vom See zu stellen. Wenn es dann soweit ist, hinüberraufen, aufs Motorrad steigen und ab nach Osten. Dahin will bestimmt keiner. Da ist dann noch Frieden.

Apropos, sagt Sylvia, der Mann ist noch immer unten im See, oder?

Ja, ist immer noch unten. (120)

(シルビアが言う: 私いつも思うのよ、私たちもまた逃げなければならないんじゃないか、その時には私たちも誰にも助けてもらえないんじゃないかって。

デトレフが言う: 純粋に蓋然性の法則に従えばね。

シルビアが言う: それでいったいどこへ逃げるの。

リヒャルトが言う: 僕は考えたんだけど、古いバイクを湖の向こう岸に置いておく。そうしていいよとなったらボートを漕いで行って、バイクに乗って東へ行くのさ。東へなんかきつと誰も行こうとしないだろうから。だからあっちはまだ平和だよ。

ところで、とシルビアが言う、あの男の人はいまだに湖の底かしら。

ああ、まだ下にいるよ。)

ここでは「:」の後に続く何人かの会話の後で、sagt Sylvia によるみんなを現実に戻す会話が入る。最後の答えは Richard のものと見ることができるで

ジェニー・エルベンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

あろうが、実際には誰が発したものかわからない。

Ein zweiter meldet sich: Ich habe gehört, es sind von dem Lager dort fünf Kilometer bis zur nächsten Bushaltestelle.

Ein dritter: Und dann von einem Tag auf den andern!

Ein vierter: Wir brauchen Duschen, die abschließbar sind, alles andere verstößt gegen unsere Gesetze. (102)

（2人目が発言を求める：あそこの施設から最寄りのバス停までは5キロあると聞いたんだが。

3人目：そして突然たった1日でね。

4人目：俺たちには鍵のかかるシャワーが必要だ。ほかのすべてが俺たちの戒律に反している。）

ここでは不特定の人たちの発言が拾われている。

4. 2. 5. 間接話法

作品では間接話法も多用されている。

Draußen aber besteht er darauf, dass er ihm das Geld sofort wiedergeben will, und lässt nichts gelten und sagt, er koche jetzt sowieso, und Rufu sei auf jeden Fall eingeladen zum Essen. (161f.)

（しかし彼は外で、お金をすぐに返したいと主張して譲らず、今からどうせ料理をするのだし、ルーフをどうしても食事に招待したい、と言う。）

Als Richard ihm sagt, dass das Essen nun fertig sei, legt er das Buch beiseite und bedankt sich. (163)

（リヒャルトが、さあ食事ができたよと言うと、ルーフは本をわきへ置いて礼を言う。）

27章においてアワドの視点で3人称を用いて語られているところでは、リヒャルトの質問が間接話法で示される。

...und der Gedanke an Blut steckt in seinem Kopf, und der ältere Herr setzt sich und sagt, er habe noch ein paar Fragen, wenn es möglich sei, und der Gedanke an seinen Vater steckt in seinem Kopf... (165)

（…そして血についての考えが彼の頭につきささっている、そして中年の紳士

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

は腰を下ろし、できればもう少し質問があるのだがと言う、そして自分の父親についての考えが彼の頭につきささっている・・・)

4. 2. 6. 間接話法に続けて直接話法に移行している例も見られる。

Eine junge Frau mit einem Mikrophon in der Hand kommt auf die Knochige zu.

Sie gebe kein Interview im Moment, sagt die knochige Frau.

Sie wissen vielleicht, dass gerade verhandelt wird über ein Winterquartier.

Deswegen bin ich ja, sagt die junge Frau. (47)

(マイクを手にした若い女性が痩せぎすの女性に近づいてくる。

今はインタビューお断りよ、と痩せぎすの女性が言う。

あなたはひょっとして冬期の宿泊施設についてちょうど交渉が行われていることを知っていますか。

だから私はここに来たんですよ、と若い女性が言う。)

In der Eingangshalle des Heims sagt er zur Rezeptionstin, er wolle die Flüchtlinge sprechen.

Ja, von wo er denn komme.

Von zu Hause, sagt er.

Nein, das meine sie nicht, sondern von welcher Institution?

Von keiner, sagt er, nur aus Interesse.

Wollen Sie etwas sprechen?

Nein.

So einfach ist das aber nicht, sagt die Frau an der Rezeption. (55)

(施設の入口のホールで彼は受付の女性に、難民と話したいのだがと言う。

そう、どこからいらしたのですか。

家からです、と彼は言う。

いいえ、そうではなくて、どの研究所からですか。

どこからでもなく、ただ興味からです、と彼は言う。

あなたはなにか話したいのですか。

いいえ。

でも、そう簡単ではありませんよ、と受付の女性が言う。)

4. 3. 話法の混用

難民たちが自分のことを語るときには大部分の場合 1 人称の直接話法が用いられている。その際にはしばしば英語の文や単語が効果的に挟まれる。しかし、アワードがどのようにしてオラーニエンプラッツへたどり着いたかを語る場面では独特の語り口が示される。そこでは 3 人称の語り、1 人称の直接話法、人に言われたことを客観的に示す間接話法が混用されている。その際に 3 人称の語りは体験話法と見ることができる。ここでは 3 人称の主語 er を 1 人称で訳してみる。

Dann also eben Berlin. Ungewaschen saß er im Flugzeug. Nach der Ankunft sprachen rings um ihn alle die neue fremde Sprache, er verstand nichts mehr, konnte nur nicken.

Sah Leute in einen Bus steigen: Fährt der ins Zentrum? Drei Nächte am Alex. Ein Mann sagte ihm, es gebe da einen Platz. Mit Afrikanern wie mir? Dann kann ich mich dort bestimmt endlich waschen. Der Mann kaufte ihm eine Fahrkarte am Automaten. Eine Maschine, aus der ein Fahrschein kommt? Deutschland is beautiful!

Dann sah er die Zelte.

Ich stand allein. Der Mann ging weg. Noch nie in meinem Leben hatte ich in einem Zelt geschlafen.

Da sollte er wohnen?

In einem Zelt?

Er stand inmitten der Zelte und weinte.

Aber dann hörte er jemanden Arabisch spechen, mit libyschem Dialekt.

Am Oranienplatz bekam er zu essen. Und einen Schlafplatz.

Der Oranienplatz sorgte für ihn, so wie in Libyen sein Vater.

Seinen Vater wird er niemals vergessen, und ihn immer in Ehren halten.

Und genauso wird er auch den Oranienplatz nie vergessen immer in Ehren halten. (83)

（こうしてベルリンに着いた。俺は汚れた身体で飛行機に乗っていた。到着後

ジェニー・エルベンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

俺の周りではみんなが新しい外国語をしゃべっていた。俺にはまったくわからなかった、ただ頷いていた。俺は人々がバスに乗るのを見た：このバスは都心へ行きますか。アレックスで3晩過ごした。男の人が俺に、ある場所がある、と言った。俺のようなアフリカ人がいる？ そうしたら俺はきっとそこで身体を洗うことができる。男の人は俺に自販機で切符を買ってくれた。切符が出てくる機械？ ドイツってすごい！

それから俺はテントを見た。

俺は1人で立っていた。男の人は去っていった。俺は生まれてから1度もテントで寝たことなどなかった。

ここに俺は住まなければならないのか？

テントの中に？

俺はテントの中で立って泣いた。

でもその後誰かがリビア方言のアフリカ語を話しているのを聞いた。

オラーニエンブラッツでは食べ物ももらえた。寝床も。

オラーニエンブラッツはリビアで父がしてくれたように俺を世話してくれた。

俺は父を決して忘れないし、ずっと尊敬し続けるつもりだ。

そして同様にオラーニエンブラッツのことも決して忘れないし、ずっと尊敬し続けるよ。）

5. まとめ

先にも見たように、エルベンベックが難民を題材にした作品の構想を立てリサーチをしたのは、ヨーロッパにおける難民の数が徐々に増えてきてはいたものの、2015年以降のシリア難民をはじめとする難民急増現象の前のものである。ドイツでは当時難民を歓迎するムードが高まっていた⁽¹⁸⁾。難民によるものと疑われる暴行事件や犯罪などが大きく取り上げられることも少なかった。そんな折に刊行された難民問題をテーマにした“Gehen, ging, gegangen”はまさに「時の本」となった。その後、作品が刊行された直後くらいからドイツ国内の難民に対する世論は変化し始める。エルベンベック自身は、自分の作品は政治状況に対する論評として考えられたものではなく、構想はずっと以前に立

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

てていたと述べている⁽¹⁹⁾。また、難民問題を扱うにあたって表現形態を小説としたのは、文学的に書くということが自分の表現形式であり、文学はいくつかの基本的な問題を日々の政治とは違った形で体験できるようにするし、また質問を別様に立てることもできるからだとしている⁽²⁰⁾。

小説化の際の主人公は旧東独出身の元大学教授リヒャルトである。リヒャルトは、いわば作者の分身として作者自身が行ったリサーチを追体験している。しかし、リヒャルトの存在は単に作者の分身にはとどまらない、自らも内面に問題を抱えた人物として描かれる。

このリヒャルトが、最初は観察者として異文化である難民とかかわりながら、徐々に受容していく。それとともにリヒャルトにも変化が生じ、内面の問題も解決の方向へ向かう。つまり、主人公は単に難民に関する状況についての報告者にとどまるのではなく、核としての主人公の内面的変化が描かれる。そうすることで散在しているように見える難民に関する報告が主人公を中心に配置される。これが小説としての成功に繋がっているといえる。

作品の最後の場面はいわば作者エルペンベックの理想像であろうと先に述べたが、作品に出てくる登場人物は難民たちも主人公の友人たちもほとんどが善良な人々で、悪意のある人物は前面には出て来ない。この点に関しては、一読したときに筆者も違和感を覚えた。難民問題に対する現実の一面は確かに表しているが、もう1つの面を故意に隠しているような気がしたのである。しかし、作者自身が言うように文学には現実を映す多様な表現方法があるのだとすれば、この作品で作者は主人公リヒャルトのように草の根として現実の問題に関わるというのも1つの方法だと提示しているのではないかと解釈できる。そのことは本の最後に付された寄付の誘いが明白に示している。

注

（1）以下のサイトを参照した。

・ Dana Buchzik: Trifft ein Berliner Professor auf Flüchtlinge

・ Hannah Lühmann : Ein Roman als Crashkurs in Flüchtlingskunde

（2）以下のサイトの書評を参考にした。

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

- ・ Dana Buchzik: Trifft ein Berliner Professor auf Flüchtlinge（前掲）
- ・ Hannah Lühmann: Ein Roman als Crashkurs in Flüchtlingskunde（前掲）
- ・ Ulrike Sárkány: Apoll und Tristan am Oranienplatz
- ・ Friedmar Apel: Wir wurden, werden, sind sichtbar
- ・ Maren Keller / Sebastian Hammelehle: Gut gemeint wie die ganze Willkommenskultur
- ・ Jörg Magenau: Süddeutsche Zeitung Besprechung von 31.08.2015
- ・ Jenny Erpenbeck: Gehen, ging, gegangen
- （3）Ulrike Sárkány: Apoll und Tristan am Oranienplatz（前掲）参照。
- （4）Erpenbeck, Jenny: HEIMSUCHUNG Roman. München.⁸ 2010
- （5）以下の文献を参考にした。
- ・ 墓田桂 『難民問題』中公新書（2016）83－100頁
- ・ 滝澤三郎・山田満（編著）『難民を知るための基礎知識』明石書店（2017）211－246頁
- （6）墓田桂（前掲書）101－106頁参照。
- （7）同上、105頁参照。
- （8）以下のサイトのインタビューを参考にした。
- ・ Cornelia Geißler: Flüchtlingsroman“Gehen, ging, gegangen” von Jenny Erpenbeck:
Den Menschen, die zu uns kommen, ein Gesicht gegeben
- ・ Claudia Christophersen: Die Grammatik der Flucht
- ・ Thomas Frey: Jenny Erpenbeck: Von Flüchtlingen lernen
- ・ Ilka Lorenzen: Mit Jenny Erpenbeck in Berlin
- （9）ランペドゥーサ島海難事故については次のサイトを参照した。
<http://jp.reuters.com/article/14n0ht3ju-italy-migrant-boat-300-dead-id JPTYE99208120131003>
- （10）Claudia Christophersen: Die Grammatik der Flucht（前掲）
- （11）Cornelia Geißler: Flüchtlingsroman “Gehen, ging, gegangen” von Jenny Erpenbeck: Den Menschen, die zu uns kommen, ein Gesicht gegeben（前掲）
- （12）引用の後の括弧内の数字はテキストの頁を示している。
- （13）Ilka Lorenzen: Mit Jenny Erpenbeck in Berlin（前掲）
- （14）Cornelia Geißler: Flüchtlingsroman “Gehen, ging, gegangen” von Jenny Erpenbeck: Den Menschen, die zu uns kommen, ein Gesicht gegeben（前掲）

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

(15) Fiktionsbescheinigung は、外国人局が滞在許可を求めてなされた申請を審査する期間に対して付与される証明書である。Duldung は、出国義務がある外国人についての国外追放の一時的停止である。これらはいずれも滞在許可ではない。

(16) Ilka Lorenzen: Mit Jenny Erpenbeck in Berlin（前掲）

(17) 以下の下線はいずれも筆者による。実線（——）は必要に応じて指摘すべき箇所に付す。その他必要な箇所で、会話中の直接話法には二重線（＝）を、間接話法には波線（~~~~）を付す。

(18) 墓田桂（前掲書）103頁参照。

(19) Thomas Frey: Jenny Erpenbeck: Von Flüchtlingen lernen（前掲）

(20) 同上。

テキスト

Erpenbeck, Jenny: GEHEN, GING, GEGANGEN. München.⁵ 2015

引用・参考文献

- ・ Erpenbeck, Jenny: HEIMSUCHUNG Roman. München.⁸ 2010
- ・ Wendland, Hans-Georg: „Gehen, ging, gegangen“ von Jenny Erpenbeck. Inhaltlicher Überblick und Analyse der Erzählstruktur. GRIN Verlag. 2016
- ・ Wendland, Hans-Georg: „Gehen, ging, gegangen“ von Jenny Erpenbeck. Thematische Schwerpunkte, Figurenkonstellation, zentrales Motiv und Symbol. GRIN Verlag. 2016
- ・ 墓田桂 『難民問題 イスラム圏の動揺、EUの苦悩、日本の課題』中公新書 2016
- ・ 滝澤三郎・山田満（編著）『難民を知るための基礎知識』明石書店 2017

参考サイト

- ・ Cornelia Geißler : Flüchtlingsroman “Gehen, ging, gegangen” von Jenny Erpenbeck: Den Menschen, die zu uns kommen, ein Gesicht gegeben
<http://www.berliner-zeitung.de/kultur/literatur/fluechtlingsroman--gehen--ging--gegangen--von-jenny-erpenbeck-den-menschen--die-zu-uns-kommen--ein-gesicht-gegeben> (2017.7.13.)
- ・ Claudia Christophersen: Die Grammatik der Flucht

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

<https://www.ndr.de/kultur/Jenny-Erpenbeck-im-Gespraech,erpenbeck124>. (2017.7.13.)

・Thomas Frey: Jenny Erpenbeck: Von Flüchtlingen lernen

<http://www.focus.de/kultur/buecher/literatur-jenny-erpenbeck-von-fluechtlingen-lernen1> (2017.8.31.)

・Ilka Lorenzen: Mit Jenny Erpenbeck in Berlin

<http://www.ndr.de/kultur/Mit-Jenny-Erpenbeck-in-Berlin,erpenbeck130> (2017.8.30.)

・Dana Buchzik: Trifft ein Berliner Professor auf Flüchtlinge

<http://www.spiegel.de/kultur/literatur/gehen-ging-gegangen-von-jenny-erpenbeck-rezension-a> (2017.7.3.)

・Hannah Lühmann: Ein Roman als Crashkurs in Flüchtlingskunde

<https://www.welt.de/kultur/literarischewelt/article145830887/Ein-Roman-als-Crashkurs-in-Fluechtlingskunde>. (2017.7.3.)

・Ulrike Sárkány: Apoll und Tristan am Oranienplatz

<https://www.ndr.de/kultur/buch/tipps/Jenny-Erpenbeck-Gehen-ging-gegangen>, (2017.8.31.)

・Friedmar Apel: Wir wurden, werden, sind sichtbar

<http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/rezensionen/belletristik/gehen-ging-gegangen-von-jenny-erpenbeck> (2017.9.18.)

・Maren Keller/Sebastian Hammelehle: Gut gemeint wie die ganze Willkommenskultur

<http://www.spiegel.de/kultur/literatur/bestseller-gehen-ging-gegangen-von-jenny-erpenbeck> (2017.9.4.)

・Jörg Magenau: Süddeutsche Zeitung Besprechung von 31.08.2015

<https://www.buecher.de/shop/berlin/gehen-ging-gegangen/erpenbeck-jenny> (2017.7.13.)

・Jenny Erpenbeck: Gehen, ging, gegangen

<https://www.perlentaucher.de/buch/jenny-erpenbeck/gehen-ging-gegangen> (2017.7.3.)

・ランベドゥーサ島海難事故

<http://jp.reuters.com/article/l4n0ht3ju-italy-migrant-boat-300-dead-idJPTYE99208120131003> (2017.9.23.)

ジェニー・エルペンベックの“Gehen, ging, gegangen”に関する一考察（山田）

A Study on Jenny Erpenbeck's *Gehen, ging, gegangen* (*Go, Went, Gone*)
— The Novelization of the Refugee Problem and its Significance —

Yasuko YAMADA

Abstract

Gehen, ging, gegangen is a novel which is about refugees from Africa. The refugees want to live and work in Germany. The title expresses the conjugations of German verbs, which refugees work hard to learn, and the unavoidable movement of refugees. The author did considerable research beforehand by visiting refugee camps and the refugee reception centers.

For the refugees who come into Europe, Germany is one of the ideal places where they can live, because they will be able to get there to safety and the good living standard. The opinion of the author is that they should be given licenses to stay and work in Germany.

The author expressed the theme of refugees not as a reportage but as a novel. The protagonist of the novel is an ex-professor, who has just retired. He was at first indifferent to refugees, who were as strangers, but little by little he builds connections with them, and accepts them. At the end, German people and refugees meet together and understand each other well. The protagonist is free from a long-term trauma. In the novel is the story of the change of the protagonist is depicted as a straight line. Around this line are information of the situation about the refugees and the history and culture of Africa, which the author researched in depth.

All through the novel, the point of view of the narration and the style of conversations are varied and this is, what makes the novel so richly expressive.

Keywords : migration, time, refugee, different cultures, Berlin